

学生支援 GP における2008年度フィールド体験実習に関する報告

大地純平*・中村寛志**・加藤正人**

* 信州大学学生総合支援センター

** 信州大学農学部附属アルプス圏フィールド科学教育研究センター

要 約

本稿では2008年に行われた、学生支援 GP フィールド体験プログラムにおけるフィールド体験実習の内容、学生アンケート結果について報告し、今後のフィールド体験実習についての提言を行う。

キーワード：学生支援 GP、フィールド体験実習、学生アンケート結果

1. はじめに

2007年度に信州大学の学生支援 GP プログラムとして「個性の自立を〈補い〉〈高める〉学生支援」が採択され、2008年度には「〈高める〉支援」として、フィールド体験実習を農学部新入生ゼミナールの一環として実施した。本資料では、実習の内容と学生アンケート結果について報告し、実施結果より得られた知見を元に今後のフィールド体験実習についての提言を行い、それを紹介する。

II. フィールド体験実習の内容と経過

2008年度のフィールド体験実習は夏季休暇中に農学部新入生を対象に、各学科単位で実施された。実施内容としては森林科学科「演習林体験ゼミ」の1回、食料生産科学科は動物コース「牧場体験ゼミ」、植物コース「農場体験ゼミ」の2回、応用生命科学科「野辺山体験ゼミ」の1回、計4回の実習を実施した。このうち森林科学科と食料生産科学科においては実習のカリキュラム化が行われているが、応用生命科学科では非カリキュラムとして実施した。また、「牧場体験ゼミ」、「農場体験ゼミ」は食料生産科学科で学生支援 GP 以前より行われていた実習を踏襲する形で実施された。(表-1)

(1) 森林科学科

演習林体験ゼミは学生支援 GP のフィールド体験実習のキックオフイベントであったが、プログラム一日目に実習中学生が蜂に刺され男子2名、女子1名の合計3名(蜂に刺されたのは合計4名)が途中離脱、チャーターした大型バスの幅員



写真1 手良沢山ステーション散策

超過による現地不到達(手良沢山宿舎)などのアクシデントが起きた。特に蜂被害においては被害を受けた学生を受け入れてくれる病院がなかなか見つからず、体験実習中の医療体制確保について課題があったが、現在は医師会等へ信州大学として受入れ依頼を行い、医療体制確保に努めている。

一日目終了以降は二日目終了時まで、大きな事故などはなく無事に実習を終了することが出来た。

(2) 食料生産科学科

食料生産科学科では、学生支援 GP 以前より新入生ゼミの一環として牧場・農場体験ゼミを行っていたこともあり、全体としては特に問題なくスケジュールが進行した。牧場体験ゼミではウシ、ヤギ、ヒツジと言った家畜に触れ、一部の学生は農場見学でウシの出産に立ち会うこともでき、新入生にとって貴重な経験が出来たものと思われる。

農場体験ゼミにおいては、天候不良により一部予定変更やスケジュールの遅延を余儀なくされる場面もあったが、特徴的な経営を行っているJA産直市場の見学、イネやブドウの収穫、餅つきな

受付日 2009年1月5日

受理日 2009年2月13日

表-1 2008年度フィールド体験実習実施内容

<p>○森林科学科 演習林体験ゼミ</p>
<p><日程> 8月4～5日(1泊2日) <場所> 農学部附属 AFC 構内ステーション, 手良沢山ステーション <参加者> 学生 一年生:64名(男44,女20・離脱3名,途中参加1名含む。) 院生等:4名(男3,女1) 教員 AFC:3名 GP:2名 技官等:4名 <実施内容> 1日目 ガイダンス, 構内ステーション散策, 作業(森林整備), 話題提供(環境に関する自分と人の考えの違い)によるグループディスカッション, 自由時間 2日目 手良沢山ステーション散策, 作業(造林鎌による下草刈り), 宿舎清掃, ゼミまとめ (一部を除き食事は学生が交代で担当して用意した。)</p>
<p>○食料生産科学科動物コース 牧場体験ゼミ</p>
<p><日程> 9月8～10日(2泊3日) <場所> 農学部附属 AFC 野辺山ステーション <参加者> 学生 一年生:20名(男8,女12) 教員 学科:8名 AFC:1名 GP:2名 <実施内容> 1日目 ガイダンス, 野辺山ステーション散策, 作業(ベニバナインゲン皮むき, 飼料計量), 研究室紹介, ミーティングと自由時間 2日目 教員による講演(家畜と野生動物)とグループディスカッション, 酪農家見学, 作業(牧柵作り, ヤギの爪切り), 教員とのディスカッション, 自由時間 3日目 教員による講演(家畜飼料学とその展望)とグループディスカッション, 宿舎清掃, ゼミまとめ (一部を除き食事は学生が交代で担当して用意した。)</p>
<p>○食料生産科学科植物コース 農場体験ゼミ</p>
<p><日程> 9月17～18日(1泊2日) <場所> 農学部附属 AFC 構内ステーション <参加者> 学生 一年生:39名(男30,女9) 教員 学科:6名(全日程通しは1名) AFC:1名 GP:1名 技官等 1名 <実施内容> 1日目 ガイダンス, 農学部農場見学, 実習(稲のはぎ掛け, 稲刈り), 市場見学(JA産直市場「あじーな」), 教員とのディスカッション, 自由時間 2日目 構内ステーション散策, 実習(ライマビーンズの皮むき, 餅つき, ブドウの収穫), 教員とのディスカッション, ゼミまとめ (食事は大学生協及び, 高遠青少年自然の家で提供)</p>
<p>○応用生命科学科 野辺山体験ゼミ</p>
<p><日程> 9月25～26日(1泊2日) <場所> 農学部附属 AFC 野辺山ステーション <参加者> 学生 一年生:5名(男3,女2) 院生等:2名(女2) 教員 学科:1名 GP:2名 <実施内容> 1日目 ガイダンス, 森林散策(美し森), 野辺山ステーション散策, 作業(ベニバナインゲンの収穫), 研究室紹介と教員とのディスカッション, 自由時間 2日目 野辺山国立天文台・南牧村交友館見学, サントリー白州蒸留所見学, ゼミまとめ→(雨天のため野外散策予定を変更) (一部を除き食事は学生が担当して用意した。)</p>



写真2 ヤギの爪切り



写真3 イネの収穫とはぎ掛け



写真4 美し森散策

どの体験が行われた。

(3) 応用生命科学科

非カリキュラムであった野辺山体験実習においては、新入生の参加が5名と少なく、天候不良も重なり予定通りのスケジュールとはいかなかった。その中においても1日目には野辺山「美し森」での散策、農場でのライマビーン収穫などの実習を行うことは出来た。特に今回、農学部より参加してくれた院生、学部生2名のサポートは素晴らしく、率先して新入生とコミュニケーションをとるなど非常に助けられた。

III. アンケート結果と考察

アンケートは各ゼミとも同様の質問での記述式アンケートを行った。回答者数は森林61, 食料生産動物系20, 食料生産植物系39, 応用生命5であり回収率は100%である。図-1はアンケートの「問①実習で学んだこと」, 「問②実習に参加して良かったこと」についてまとめたものである(応用生命科学化は参加者少数のため省略)。

アンケート調査の結果, 各学科ともに「実習・専門に関すること」への興味・関心は非常に高く, 参加した新入生全員が実習で専門の一部でも触れられたことに肯定的な意見を述べていた。次いで「クラスメイトとの交流」についても多くの学生が言及しており, 特に森林科学科・食料生産科学科(動物)では半数以上の学生が「今まで話す機会が無かったクラスメイトと話すことが出来た。」「新たに友達が増えた」と回答をしていた。このことから, 大学入学以降, 予想以上にクラスメイト間の交流が進んでいないことが確認されたと同時に, フィールド体験実習を実施することが学生間の交流を促進し, 学生間ピアサポートの下地作りとして効果が高いことがわかった。

また, 「教員・先輩学生との交流」にも多くの学生が好意的な意見を述べており, 教員や先輩学生の参加は一年次生の疑問や不安を解消することに大きな効果を発揮するとともに, 新入生からの直接的なニーズ把握を促進するものと考えられる。

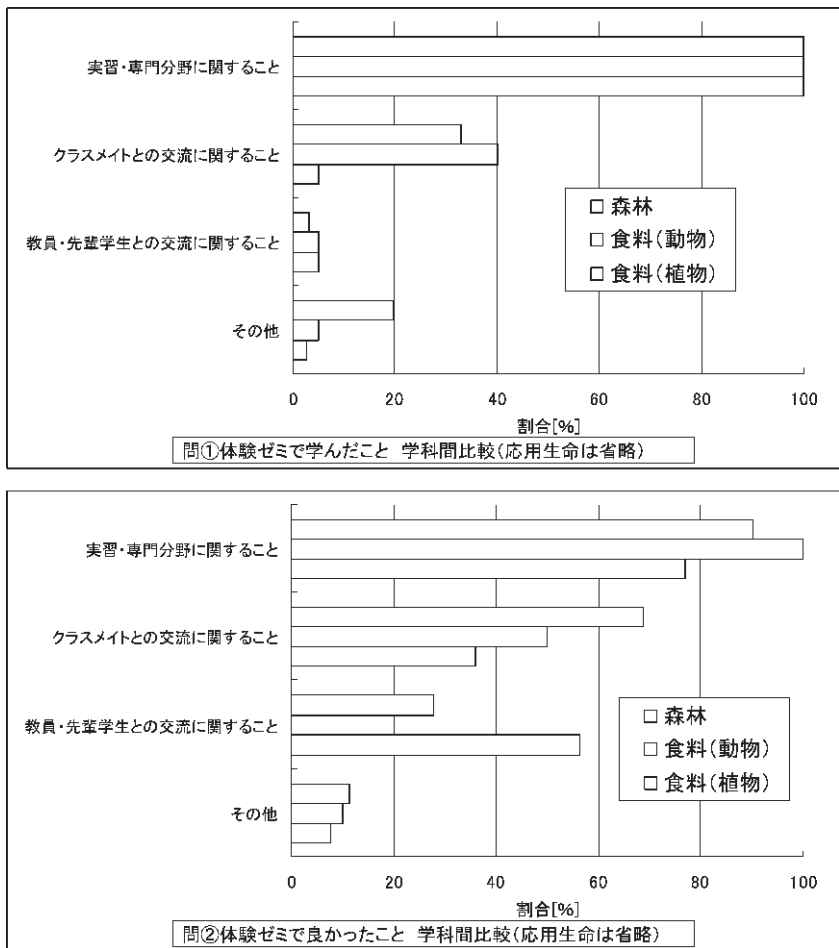
IV. 今後のフィールド体験実習への提言

1. フィールド体験実習のカリキュラム化

フィールド体験実習のカリキュラム化の効果としては, 学生の参加意欲の向上が挙げられる。現にカリキュラム化されている森林科学科(64名), 食料生産科学科(動物20名, 植物39名)においては学生の大半が参加しているにもかかわらず, カリキュラム化が遅れた応用生命科学科では5名しか参加しておらず, その理由としては, プログラムについて教員・学生ともに周知されなかったこと, 単位の無いプログラムに対する学生の関心の低さが考えられ, プログラムのカリキュラム化は参加者確保のための必要条件といえる。

2. アイスブレイキングの強化

今回実施した農学部対象のプログラムでは, 特に二年度以降の専門教育に向けた入門ゼミ的な意味合いが強く, ゼミ実施前に自己紹介などのアイスブ



図一 1 フィールド体験実習アンケート結果

レーキングを行っていない。また、学生間である程度見知っているのではないかと先入観もあった。しかし、実際には面識の無い学生が予想以上に多く、お互い遠慮するなどの理由からその後のプログラム進行に遅れを生じることもあった。フィールド体験プログラムは、その特性としてアイスブレイキング的な要素も持つが、実習開始前にあらかじめ互いを見知っておくことで個々の連携がスムーズになり、フィールド体験の効果（共同作業による人間関係の構築）が十分に発揮されると考えられる。

3. 自発的な行動を促すような仕組みづくり

プログラムの実行中、特にスケジュールとスケジュールの合間の時間などに特に何もすることも無くただじっとしている学生が多く見られた。スケジュールの周知が徹底されていなかったこと、天候不順による予定変更に伴う空き時間の増大などがその原因の一つであるが、学生側の積極性がいまひとつ感じられない場面も多々あった。今後、自発的な行動を促すための仕組みづくりが必要になると考えられる。その対策の一つとして、先輩学生による実習

参加・サポートが挙げられる。新入生にとって先輩学生は、最も身近で話しかけやすい存在であると同時に学部経験者として頼れる存在である。先輩学生がサポートとして実習に参加することで、新入生の積極的参加を促すことが出来き、先輩学生においても新入生のサポートをすることで自分の力量を確認する機会になると考えられる。

4. 雨天時の対処

今回実施したフィールド体験実習は、屋外での作業がほとんどである。急な天候の変化や予定変更はスケジュール進行に滞りを発生させ、学生の積極性を削ぐ原因にもなる。そのため今後の実習においては雨天時の代替スケジュールについても十分検討、準備しておく必要がある。

V. おわりに

今回、学生支援 GP としてのフィールド体験実習をはじめて実施する中で、多くの課題・問題点を把握することが出来た。この結果を生かし、来年度以降のフィールド体験実習を学生のためにより内容の

充実したものになりたい。また、実習の実施にあたっては本部・学生支援課、学部・事務部門の方々に多大な御協力を頂きましたこととお礼申し上げます。

**A report on the field experience training program in
“the student support GP, 2008”**

Jumpei OHCHI*, Hiroshi NAKAMURA and Masato KATOH****

*Student general support center, Shinshu University

**Education and Research Center of Alpine Field Science, Faculty of Agriculture, Shinshu University

Summary

In this paper, we reported contents of the field experience training program and the results of questionnaire gathered from the students in the student support Good practice of ministry of education, culture, sports, science and technology (GP), 2008. In addition, we submitted a proposal for future field experience training programs.

Key word : field experience training program, a result of student questionnaire, student support GP